

本棚



放射線リスクコミュニケーション —健康影響を正しく理解するために—

柴田義貞 編集



平成 21 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災並びに福島第一原子力発電所事故以降今日まで、“安心と安全”という言葉を見聞きしない日はありません。原発事故に伴う土壌の放射能汚染に関しては、今日なお除染に

追われており、福島県民をはじめ多くの日本国民の放射線の人体影響に関する恐怖心も払拭されていないのが現状でありましょう。放射線はご存知の通り、五感で感知できないことから、“リスク”を正しく数値化、評価し、管理するためには、科学的エビデンスをもって対処しなければならぬとされています。しかしながら、“リスク”とは何なのでしょう？ 我が国の国語辞典では“リスク＝危険”とのみ書かれており、私をはじめ多くの方は“怖いもの”、“危険なもの”と理解していることと思います。本書を一読し、“リスク”の意味（定義）が、“何を好ましい/好ましくないと考えるか”により異なってくるということをはじめで知りました。

本書は、平成 19 年度に採択された長崎大学グローバル COE プログラム“放射線健康リスク制御国際戦略拠点”事業での、放射線リスクの正しい理解を目指して、原発事故前に開催された講演と座談会をまとめた「リスクコミュニケーションの思想と技術」（平成 21 年 3 月出版）と「リスク認識とリスクコミュニケーション」（平成 22 年 2 月出版）の合冊版です。

I. の「リスクコミュニケーションの思想と技術」では、木下富雄先生（（財）国際高等研究所）により、“リスクの定義”、“リスク概念の導入の経緯”、“リスクコミュニケーションとは何か？”などの講演内容が紹介されています。続いて、土屋智子先生（（財）電力中央研究所）は、チェルノブイリ原発事故後の放射能汚染でのイギリスのリスクコミュニケーションの失敗例、フランスの成功例に始まり、続いてリスク情報の伝達、評価、改善に関する自身の研究例、さらに平成 11 年に起きた我が国の東海村 JCO 臨界事故の安全に関して施設周辺の住民とのリスクコミュニケーションの実践例を話され、リスクコミュニケーション実践の留意点を紹介されています。そして最後に、専門家は一般市民が理解できない理由を教育やメディアのせいにする傾向があるが、自身の話し方や情報提供の仕方原因があることに気付いてほしいと述べており、“実在的を得た指摘”で、私自身反省した次第です。その他、米原英典先生（（独法）放射線医学研究所）による放射線防護での法規制、神田玲子先生（（独法）放射線医学研究所）による自身の研究所でのリスクコミュニケーション研究の取組みを紹介されています。

II. の「リスク認識とリスクコミュニケーション」に関しては紙面の関係で講演者と演題のみを以下の通り紹介いたします。

「一般人のリスク認知と信頼」

中谷内一也先生（同志社大学）

「原子力分野でのリスクコミュニケーション」

篠原邦彦先生（（独法）日本原子力研究開発機構）

「医療放射線領域のリスクコミュニケーション」

大野和子先生（京都医療科大学）

「今、原子力に必要なコミュニケーションとは」

八木絵香先生（大阪大学）

いずれも国内の第一人者による大変素晴らしい講演内容であり、特に放射線の専門家の役に立つ内容と思われまます。

また、講演の内容の後には柴田義貞先生（長崎大学）が司会をされ、山下俊一先生（福島県立医科大学）、木下富雄先生、篠原邦彦先生、小島正美先生（毎日新聞社）による座談会の内容が紹介されていますが、リスクコミュニケーションをより深く理解するのに大いに役立つと思われまます。

さらに、巻末には専門用語解説が添付されており、専門家以外の方が一読されることにも考慮されていることも特記させていただきます。

放射能汚染による人体影響を“専門家である研究者”と“非専門家である一般市民”といった立場の異なる両者で議論した場合、“両者が合意するのは極めて難しい”のは当然に思えます。なお、現在も“リスク”の定義は統一されていないようですので、放射線の専門家とは言われていますが、リスクに関しては門外漢である私たちが“リスクの概念”を誤解しているのも仕方なかったのかもしれない。安全が危険かが不明な“グレーゾーン”に対し真正面から取り組むことが喫緊の課題である今日、専門家と非専門家という立場の異なる両者には、まず初めに“リスク”の定義を学び、いかにして共通の物差しと同一の言葉でリスク回避を目指してコミュニケ

ーションを図るかが求められています。本書編集者並びに関係者、いずれの方がグローバル COE プログラム最終年に福島第一原発事故発生を予想できたでしょうか。本書の序文で COE プログラムリーダーの山下先生が述べられておりますように“福島、そして東北の復興なくして日本の再生なし！”という取組みに一助どころではなく、大いに役立つ良書であると確信しています。専門家はもちろんのこと一般の方々に是非読んでいただきたいと思えます。

(小島周二 東京理科大学)

(ISBN978-4-904561-47-8, B 5 判 446 頁, 定価本体 2,000 円, (株)長崎新聞社, ☎095-844-5469, 2012 年)

新刊

はじめての放射線測定 —正しく理解し、正しく測ろう放射線—

編集・発行 日本アイソトープ協会 【2012年12月発行】
B5判・143頁 定価1,680円 会員割引価格1,470円(消費税込)

「はじめての放射線測定—正しく理解し、正しく測ろう放射線—」は、平成23年11月より当協会ホームページから無料ダウンロードできるPDF資料「やさしい放射線測定—誰もが正しく測定するために—」を基に刊行しました。今回、単行本化にあたり“機器の管理と精度”や“食品用放射線測定装置が必要になった経緯”など、昨今、特に関心が高い話題を新たに加筆し、更に中身の濃い一冊となっています。初心者でもすぐ読める“今すぐ測定したい方へ”と、より詳細に解説した“実務編 詳しく知りたい方へ”の二部構成になっています。写真やコラムもふんだんに盛り込まれていて、放射線測定の理解が深められます。放射線測定に興味があるすべての方へお勧めします。

【2色刷】

公益社団法人
 **日本アイソトープ協会**
Japan Radioisotope Association
〒113-8941 東京都文京区本駒込 2-28-45
TEL (03) 5395-8082 FAX (03) 5395-8053

- ◆ご注文はインターネットまたはFAXにてお願いします。
JRIA Book Shop : <http://www.bookpark.ne.jp/jria>
BookPark サービス : FAX (03) 5227-2060
- ◆書店でご注文の際は「発売所 丸善出版」とお申し付け下さい。